

その後運輸省交渉をするために新宿駅を使って山手線で移動したんです。車椅子 150 人ぐらいでいっぺんに乗りましたんでね、駅は大争乱状態。階段を担ぎ上げてもらわないといけないですから、もうパニック状態になった。当時世界一の経済大国と言われていた日本が、実は一皮むけば車椅子で山手線を使おうと思えばどんな様相を呈するのか。そういうことで結構海外の記事にもなったりしました。これがきっかけになって、以降、毎年です。日本各地の障害者団体に呼びかけて、述べ 30 カ所 3 千人が参加するような、誰もが利用できる交通機関を求める全国大行動、という活動が始まりました。

..*:*..

小学校 4 年まで養護学校に通った後、ある肢体不自由児施設に入居をした。もう 30 年以上前のことだが、今も忘れられないことがある。毎週水曜日の「回診日」だ。この日をいつも、ビクビクしながら過ごしたものだ。院長を先頭に部長、訓練士等が私たちの部屋に来る。そして、膝や腰を分度器のようなもので量ったりして歩く。「膝の後ろを手術しよう」と言い渡されると、次の週には手術室へ行くことになっていた。今週は、自分の番になるのではないかとハラハラしていたのだ。

施設から外泊で自宅へ帰る度に「障害が重くなつて」帰ってくる私を見て、母は怖くなり、中学校から普通学校に転校させることを決意したという。私たちの入所していた時には、「オ、曜日」が手術日（子供だったのに、「オ、曜日」という「業界用語」で覚えている）だった。手術台が 2 つあったから、毎週 2 人に手術のお鉢が周ってくることになる。事実、私たちの仲間は平均 4、5 回の手術経験がある。そして、一度たりとも、どのような効果があるのか、どのような弊害が考えられるのか等、

コラム～粘りついた記憶～障害者運動の原体験～

私はもちろん、両親も説明を受けたことは無かった。「期待された効果」が現れず、かえって「障害の重度化」をもたらしたとしても、医者▶の責任が問われた記憶もない。

入所後 3 ヶ月程して、突然、「ポジショニング」という名前の訓練が始まった。腰を伸ばすために、ベッドの上に会議室の机のような板をしかれ、うつぶせになって、腰の辺りをさらしのような布で縛りつけられる。その状態で、晩の 6 時 30 分～翌朝の 6 時まで約 12 時間近く固定された状態で寝続けなければならぬ。子供心に一番つらかったのが、トイレの問題だ。腰のところを縛り上げるので、ちようど膀胱が圧迫されることになる。我慢することができなくなり、看護婦を呼ぶ。そうすると、しびんを持ってやって来て、「早くしなさい」と命じられる。だが、脳性マヒという障害故、早くしようと頑張れば頑張るほど、かえって出なくなる。また縛られる。そうすると、圧迫されてトイレをしたくなる。それで、またナースコールで呼ぶ。「訓練をしたくないから、うそでトイレと言っているのでしよう」とこっぴどく怒られた。「うそじゃない」と心の中でつぶやいたものの、言葉にはならなかった。

この施設での医療体験は、私にとっては一生忘れることができない「思い出」、怨念とも言えるほど粘りついた記憶になっている。このことが、原体験になって障害者運動に飛び込んだと言っても過言ではない。

尾上さん・講義当日配布資料より